

令和3年度病虫害発生予報 第6号（10月予報）

今月の発生に注意を要する病虫害

作物名	病虫害名	発生時期	発生量
水稲	トビイロウンカ	平年並	やや多い
カキ	炭疽病	早い	多い
果樹共通	カメムシ類	やや遅い	やや多い
チャ	炭疽病	平年並	やや多い
イチゴ	炭疽病	平年並	やや多い
ナス	褐色腐敗病	平年並	やや多い
	うどんこ病	平年並	やや多い
アブラナ科野菜	ダイコンサルハムシ	平年並	やや多い
ハウレンソウ	ハウレンソウケナガコナダニ	平年並	多い
	シロオビノメイガ	平年並	多い
キク	褐斑病・黒斑病	平年並	やや多い
野菜類・花き類共通	シロイチモジヨトウ	平年並	多い
野菜類・花き類共通 (キク)	ハダニ類	平年並	多い
	ミカンキイロアザミウマ	平年並	やや多い

○気象予報（近畿地方の1ヶ月予報：9/25～10/24）

気温：高い 降水量：平年並か少ない 日照時間：平年並か多い

○今月の農薬適正使用のポイント

- ①アブラナ科野菜を間引き菜で収穫する場合は、農薬製剤ラベルに記載された使用上の注意事項をよく読んで、間引き菜で使用できる農薬を使用しましょう。
- ②農薬のラベルに記載された適用作物名について、思い込みや読み違いによる誤使用が起こる可能性があります。「トマトとミニトマト」、「ピーマンとシシトウ」、「ネギとワケギ」、「実えんどうとさやえんどう、えんどうまめ」などは、いずれも農薬登録内容が異なります。このほかにも、判断に迷った場合には各農林振興事務所または病虫害防除所へお尋ねください。

○今月の病虫害対策のポイント

- ①冬作物の栽培が始まっています。冬作物では、秋のうちに苗で持ち込んだ病虫害や飛来する害虫を徹底防除して、冬に残さないようにするのが基本です。結球するアブラナ科では結球するまで、施設栽培ではハウスサイドを閉め切るまでが勝負所です。農薬への抵抗性発達状況などにも留意しながら、効率的に防除してください。
- ②イチゴの施設栽培で天敵製剤を利用する場合は、天敵への影響日数を考慮して農薬を選ぶとともに、葉かきと防除作業を放飼までに済ませておき、放飼後2週間程度はこれらの作業を控えましょう。今年始めて導入する場合は、最寄りの農林振興事務所などの指導を受けて下さい。

I. 普通作物

1. 水 稻

(1) トビイロウンカ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率27%、株当たり平均密度は0.05頭と、広く発生が認められていますが、密度は低いです。

防除上の注意事項

- 1) 念のため、坪枯れの前兆の黄化が発生していないか確認します。万一発生している場合には、早めに稲刈りを行います。

2. ダイズ

(1) 吸実性カメムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）の予察灯への飛来量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 子実肥大後期（10月中旬）までの加害は、変色粒や変形粒となります。
- 2) 発生の見られるほ場では10月上旬に、マメシクイガ等の防除を兼ねて、トレボンE W等で防除します。

II. 果樹・チャ

1. カキ

(1) 炭疽病

予報内容 発生時期：早い 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発病果率4.9%と多くなっています。

防除上の注意事項

- 1) 発生園では発病果実からの二次伝染を防ぐために、発病果は必ず除去し園外で処分します。
- 2) 感染は10月半ば頃まで続きますので、富有の発生園では9月上旬に実施した基幹防除に加えて追加防除を実施します。
- 3) 台風や長雨後には、治療効果を有する炭疽病登録薬剤（スコア顆粒水和剤、オンリーワンフロアブル等）で直ちに防除を行い、感染拡大を防止します。
- 4) 9月13日付発表の病虫害情報第6号（カキ炭疽病）も参照します。

2. 果樹共通

(1) カメムシ類（チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシ・クサギカメムシ）

予報内容 発生時期：やや遅い 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、カキの平均被害果率は1.3%でしたが、ヒノキにおけるチャバネアオカメムシ成虫の平均寄生数は1.7頭とやや多くなっています。
- 2) 各地点における予察灯のチャバネアオカメムシの誘殺数は9月中旬以降一部の地域で100頭を越える日があります。
- 3) 県内8地点のヒノキ球果の平均口針鞘数は8月19日の調査（3.3本/地点）から増加し、平均で9.0本でした。果樹園飛来の目安は20~25本となりますが、地域によっては20本近いところもあり注意が必要です。

防除上の注意事項

- 1) 気温の低下とともにカメムシ類の活動は低下しますが、気温の高い日や台風の通過後にはカメムシの動きが活発になりますので、園地をこまめに観察し、飛来・被害が見

られた場合は直ちに防除します。

- 2) カキの収穫期に入っていますので、防除する場合は収穫前日数等の登録内容をラベルで必ず確認するとともに、隣接園へのドリフト防止に十分留意します。

3. チャ

(1) 炭疽病

予報内容 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の調査では、発生量はやや多いです。

防除上の注意

- 1) 秋雨前線が停滞する場合、7～10日間隔で2回防除します。

(2) カンザワハダニ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 早期発見に努め、低密度での防除を徹底します。
- 2) 発生が多い園では、整枝後に葉裏に薬剤がかかるよう丁寧に防除します。

(3) チャトゲコナジラミ

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の成虫発生量は平年並です。

防除上の注意事項

- 1) 発生が多い園は、茶株すそ部の成葉に黒いすす状のものが多く付着しています。そのような園では10月下旬以降にマシン油乳剤（商品名：トモノールS、ラビサンスプレー）で防除します。この時期の防除は次年度の密度抑制に効果が高く、1～2月に2回目の散布を行うと、より効果が高まります。
- 2) 茶株すそ部を中心に葉裏に良くかかるように散布します。

Ⅲ. 野菜類・花き類

1. イチゴ

(1) 萎黄病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の定植後の巡回調査では、発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 定植後に展開してくる新葉をよく観察します。奇形や黄化および生育抑制が認められる株は、見つけ次第抜き取り、ほ場を汚染しないよう必ず肥料袋等に入れて離れた場所に持ち出し、周辺に十分配慮した上で焼却処分します。被害株を育苗ほ周辺等に放置すると、ほ場が汚染され、翌年以降の発生原因となります。
- 2) 夏期の太陽熱消毒を実施した本ぽで発生した場合は、育苗ほが感染していたと考えられます。次年度に向けて、育苗ベンチやポットなどの資材の消毒あるいは更新を行います。また発生が年々増加している場合には、育苗施設の太陽熱消毒を検討します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の定植直後の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 10月後半以降に気温が低下した場合、発生ほ場では病勢が進展します。

防除上の注意事項

- 1) 出蕾期以降に発生すると防除が困難になりますので、出蕾までの防除を徹底します。
- 2) 薬剤防除は、薬液が葉裏や新芽にかかるように、動力噴霧機の圧力をやや弱くし丁寧に散布します。
- 3) 薬剤耐性の発達による防除効果の低下を防ぐため、同一系統剤の連用は避けます。特に、QoI 剤は耐性菌発生リスクが高いため、最低限の使用回数に止めます。

(3) 炭疽病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は9.1%、発病株率0.1%でした。

防除上の注意事項

- 1) 保菌苗を定植した場合、ビニール被覆までは降雨により発生が拡大します。
- 2) 定植後の過剰なかん水を避け、ほ場の排水に努めます。
- 3) 萎凋株や枯死株は早期に抜き取り、肥料袋等に入れ密封し、ほ場外へ持ち出し処分します。
- 4) 本ほ場で発生した場合、セイビーフロアブル20、ゲッター水和剤（収穫開始21日前まで）等により二次感染を予防します。
- 5) 9月10日付発表の病害虫情報第5号（イチゴ炭疽病）も参照します。

2. ナ ス

(1) 褐色腐敗病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は50%、発病株率は0.8%でした。
- 2) 今後の秋雨や台風による風雨で多発する可能性があります。

防除上の注意事項

- 1) 被害枝葉および果実は伝染源となるので、早期にほ場外へ持ち出して処分します。
- 2) 病原菌は水によって伝染するため、ほ場及び畝上の排水を良くし、マルチによって降雨による「はね上がり」伝染を回避します。
- 3) 台風などの強風を伴う降雨後はできるだけ早く、ホライズンドライフロアブル、ランマンフロアブル等による防除を励行します。

(2) うどんこ病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率100%、発病葉率4.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 防除前には、必ず下葉の発病葉を摘葉し、薬液が葉裏や新芽にかかるように、動力噴霧機の圧力をやや弱くして丁寧に散布します。
- 2) 薬剤耐性菌の発生を防ぐため、同一系統剤を連用せず、予防に努めます。特に、QoI 剤やDMI 剤などは耐性菌の発生リスクが高いため、連用は控えます。

(3) ミナミキイロアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、被害果率 2.3%と平年並の発生でした。

防除上の注意事項

- 1) 被害果が発生していない場合の防除は不要ですが、多発ほ場ではファインセーブフロアブルなどで防除します。
- 2) 多くの殺虫剤に対する感受性が低下していますので、十分な防除効果が得られない場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談いただくとともに、次年度作以降の天敵保護利用体系の導入についてご検討ください。

3. アブラナ科野菜

(1) コナガ・モンシロチョウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、キャベツではモンシロチョウの発生ほ場率は 25%、コナガは認められませんでした。
- 2) フェロモントラップのコナガ誘殺数は、農業研究開発センター（桜井市池之内）において平年並の発生でした。

防除上の注意事項

- 1) ジアミド系薬剤の効果が低いコナガが発生しています。キャベツ、ハクサイ、カリフラワー、ブロッコリーでは、プレバソンフロアブル5の苗かん注を行ったほ場でもその後の発生に注意し、発生が認められた場合には、他系統の薬剤を使用して下さい。

(2) 軟腐病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 結球前でも、害虫の食害が多い場合や、台風などの風雨に叩かれた場合は予防散布を行います。
- 2) 窒素過多にならないように適正施肥に努め、ほ場の排水対策を行います。

(3) ダイコンサルハムシ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、ダイコンでは発生ほ場率 100%でした。その他アブラナ科野菜で局地的に発生が認められます。

防除上の注意事項

- 1) 発生した場合は直ちに防除します。
- 2) 発生源となるほ場周辺のアブラナ科雑草を除草します。この際、餌場を失った虫がほ場内に移動する可能性がありますので、除草後はほ場内をよく観察します。
- 3) 株元の残さなどが越冬場所になりますので、収穫後の残さを持ち出して処分します。
- 4) 多発時には登録農薬でも効果不十分な場合があります。防除効果に疑問を感じる場合は各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

4. ホウレンソウ

(1) 萎凋病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 25%、発病株率 0.8%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発病株はほ場の菌密度を上げるので、見つけ次第除去するとともに、収穫残さはすき込まず、ほ場外に持ち出して処分します。
- 2) 発生ほ場では、来年の6月以降にクロピクフロー、ソイリーン等の土壌くん蒸剤で処理するか、夏期に太陽熱による土壌消毒を実施します。

(2) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では発生が認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 今後、天候不順が続くと、発生しやすい条件となりますので、施設内の高湿度を避けるため、換気と排水対策を徹底します。
- 2) 発病株は伝染源となるので、見つけ次第、除去処分するとともに、収穫残さはハウス周辺には放置せず、袋に入れて密封し、腐熟させてから処分します。
- 3) レース 1～10 抵抗性品種でも発生する可能性がありますので、天候不順が続く場合には、ランマンフロアブル、レーバスフロアブル等で予防します。

(3) ホウレンソウケナガコナダニ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 50%、被害株率 3.0%でした。

防除上の注意事項

- 1) 本葉 2 葉期のカスケード乳剤、4～6 葉期のアフーム乳剤の散布を組み合わせた体系防除を行います。
- 2) 間引き株や収穫残さは増殖源となりますので、ハウスの外に持ち出し処分します。
- 3) 土づくりに未熟な有機物（稲わら、もみがら、未熟な牛糞堆肥等）を投入すると発生を助長します。できるだけ腐熟させた堆肥を利用し、過剰な投入を避けます。

(4) シロオビノメイガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多い

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率 75%、被害株率 5.5%でした。

防除上の注意事項

- 1) ほ場をよく観察し、発生が見られたら、幼虫が小さいうちに防除します。多発時は複数回の防除が必要です。
- 2) 4mm 目の防虫ネットはハスモンヨトウやヨトウガには効果がありますが、体の小さいシロオビノメイガは侵入しますので注意します。
- 3) 収穫後の不要な残り株は、速やかに抜き取り処分します。

5. ネギ

(1) ベと病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では発生は認められませんでした。

防除上の注意事項

- 1) 降雨が続く場合は殺菌剤の予防散布を行います。特に春に発生したほ場では注意してください。
- 2) 発病株は伝染源となるため、ほ場内にすき込まずに持ち出して処分します。

(2) ネギハモグリバエ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率75%、被害葉率11%でした。
- 2) 10月に入ると蛹化した個体から順次休眠に入るので、発生は終息に向かいます。

防除上の注意事項

- 1) 発生ほ場では、株元の土中で蛹が越冬します。収穫後に残った被害株は速やかにほ場外に持ち出して処分するとともに、春の作付けまでにバスアミド微粒剤でくん蒸を行って、土中の蛹を防除します。

(3) ネギアザミウマ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや少ない

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生は認められませんでした。
- 2) 秋に向かって発生は漸減します。

防除上の注意事項

- 1) ベリマークSCの生育期もしくは育苗トレイへの株元灌注処理を行います。再発生が見られた場合はスピノエース顆粒水和剤などを散布します。散布の際、ネギは薬液をはじきやすいので、スカッシュ、まくぴかなどの展着剤を加用します。
- 2) ネギアザミウマは休眠性がなく、今後も発生は継続します。気温が高い間は増加に注意します。

6. キク

(1) 白さび病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率20%、発病株率0.4%でした。

防除上の注意事項

- 1) 発病葉は伝染源となるため、ほ場内に放置せず、持ち出して埋没等により処分します。収穫後の株も放置せず、同様に処分します。
- 2) 降雨が続く場合は、早めにジマンダイセンフロアブル等で予防します。発生初期には、必ず下葉の発病葉を摘葉してから、QoI剤のオペラフラワー乳剤、SDHI剤のカナメフロアブル、またはDMI剤のハチハチ乳剤等で防除します。その後は、降雨があれば1週間以上の間隔で上位葉を中心に防除を行います。ただし、薬剤耐性菌が出現する恐れがありますので、同一系統剤の連用は避けます。
- 3) 罹病性品種を収穫後も親株として利用する場合、次年度の伝染源とならないように、下葉かきと継続的な薬剤散布による予防を行います。

(2) 褐斑病・黒斑病

予報内容 発生時期：平年並 発生量：やや多い

予報の根拠

1) 9月下旬の巡回調査では、発生ほ場率は60%、発病株率6.6%でした。

2) 防除上の注意事項

- 1) 密植や過繁茂にならないよう通風を図るよう管理します。
- 2) 発生ほ場では下葉の発病葉を直ちに除去し、埋没処分します。
- 3) 発生初期にダコニール1000等で防除します。

7. 野菜類・花き類共通

(1) ハスモンヨトウ・ヨトウガ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）における9月のフェロモントラップでの誘殺数は平年並で推移しています。

防除上の注意事項

- 1) ほ場内では若齢幼虫から老齢幼虫まで見られます。老齢幼虫に対する薬剤の効果は劣るので、若齢期の防除に努めます。
- 2) ハスモンヨトウは、施設内では冬期も発生が続きます。防除のもれ落ちがないように、ほ場をよく観察し、必要があれば再度防除します。
- 3) イチゴほ場では、寒冷紗等に産卵する可能性があるため、苗の活着後できるだけ早く除去します。また、ビニール被覆前後の防除を徹底します。
- 4) ホウレンソウの雨よけ栽培では、4mm目の防虫ネットをハウスサイドに張り、夕方に戸締まりをすると、夜間の成虫飛来を阻止でき、産卵量を減少させることができます。

(2) シロイチモジヨトウ

予報内容 発生時期：平年並 発生量：多い

予報の根拠

1) 農業研究開発センター（桜井市池之内）における9月のフェロモントラップでの誘殺数は平年並でした。

2) 9月下旬の巡回調査では、ネギでの発生ほ場率50%でした。

防除上の注意事項

- 1) 各種殺虫剤に抵抗性の発達したシロイチモジヨトウが発生しています。防除薬剤の選択に注意すると共に、薬剤の効果に疑問を感じる場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(3) オオタバコガ（ナス、キク）

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並（ナス）
やや少ない（キク）

予報の根拠

1) 9月下旬の巡回における被害発生ほ場率は、ナスでは17%、キクでは発生は認められませんでした。

2) 農業研究開発センター（桜井市池之内）における9月のフェロモントラップ誘殺数は、平年より多く推移しました。

3) 気温の低下とともに発生は終息へ向かいます。

防除上の注意事項

- 1) 果実等の内部に食入している幼虫には、薬剤が直接接触しないので防除効果が劣ります。花蕾や新芽付近をよく観察して、ふ化～若齢幼虫期に防除を行います。

(4) ハダニ類 (イチゴ・キク)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並(イチゴ)
多い(キク)

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査における発生ほ場率は、イチゴでは25%、キクでは100%でした。

防除上の注意事項

- 1) イチゴ本ばで発生した場合、古葉を取り除いてから防除を行います。
- 2) ナミハダニ黄緑型は殺虫剤感受性の低下が進んでいますので、イチゴでは開花期に天敵製剤を導入します。
- 3) イチゴで天敵製剤を使用する場合は、天敵に影響の大きい殺虫剤が使用できません。詳細は、各農林振興事務所または病害虫防除所へお問い合わせください。

(5) アブラムシ類

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査における発生ほ場率は、イチゴでは8%、キクでは20%、キャベツでは50%でした。ハウレンソウ、ネギでの発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) イチゴでは秋期の防除を徹底します。天敵製剤を導入する場合は、影響の小さいウララDFかチェス顆粒水和剤を使用します。
- 2) アブラナ科野菜では、ウイルス病を媒介するので発生初期の防除を励行します。
- 3) 寄生部位に確実に薬液が付着するよう、散布目標を確認してから散布します。
- 4) ワタアブラムシやモモアカアブラムシは、薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用を避けます。
- 5) ネオニコチノイド系薬剤の効果が低いワタアブラムシが発生しています。薬剤の防除効果が低い場合には、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談ください。

(6) ミカンキイロアザミウマ (イチゴ・キク)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：平年並(イチゴ)
やや多い(キク)

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、イチゴでは発生は認められませんでした。キクでは発生ほ場率20%でした。

防除上の注意事項

- 1) イチゴでは、ほ場周辺に花き類を植栽したり、ハウス内に鉢花を持ち込むと発生源となります。花き類は処分し、鉢花の持ち込みは控えます。
- 2) イチゴでは、秋に侵入したアザミウマが冬期に増殖します。ハウスサイド締め切りまでに防除を徹底し、ハウス内に残さないようにします。
- 3) キクでは、着蕾から開花前に防除します。また、収穫後の2番花や親株は、好適な増殖場所であると同時に越冬場所ともなりますので、花を処分するか、冬期までに防除を行い、次年度への越冬量を減らします。
- 4) 一部地域でスピノエース顆粒水和剤に対する感受性が低下した個体群を確認しています。同一系統薬剤の連用は控え、防除効果に疑問を感じた場合は、各農林振興事務所または病害虫防除所にご相談下さい。

(7) チャノホコリダニ (イチゴ、ナス)

予報内容 発生時期：平年並 発生量：イチゴ(平年並)
ナス(やや少ない)

予報の根拠

- 1) 9月下旬の巡回調査では、発生は認められていません。

防除上の注意事項

- 1) 虫体が極めて微小ですのでルーペでも見えません。イチゴでは被害に気付いてからの防除は困難ですので、予防散布します。
2) 服の袖などについて移動しますので、露地ナスで対面作業を行った後にそのままイチゴ本ばに入るのは控えます。

※農薬に関する情報は、令和3年9月8日までの農薬登録情報に基づいて記載しています。

お問い合わせは

奈良県病害虫防除所

TEL. 0744-47-4481

その他関連情報は以下をご覧ください

奈良県病害虫防除所ホームページ

<http://www.jppn.ne.jp/nara/>

奈良県農薬情報システム (農作物病害虫・雑草防除指導指針)

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/nara>